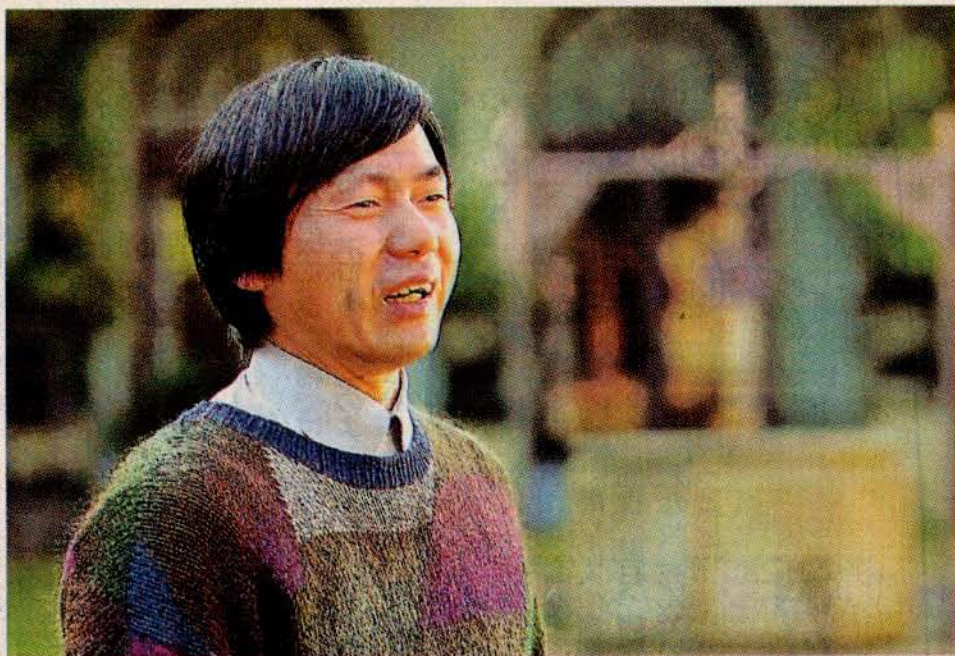


文化



QWERTY配列の謎に挑んだ安岡孝一准教授。「今、気になっているのは、X'massの「J」です」と語る(京都市左京区・京都大文研附属漢字情報研究センター)

京都大人文科学研究所准教授

安岡孝一さん

パソコンのキー配列、JISやユニコードなどの文字コード、古い石碑に刻まれた漢字の拓本、携帯電話の絵文字……。京都大人文科学研究所附属漢字情報研究センター准教授の安岡孝一さんの研究室は、文字であふれている。アルファベットや漢字、絵文字の向こうに何が見えるのだろうか。

パソコンなどのキーボードのアルファベット配列は、左上からQ、W、E、R、T、Yと続く。なぜこの配列なのか。安岡さんは何度も渡米し、五年がかりで調べ上げ、「キ

ーボード配列 QWERTYの謎」にまとめ、今年二月に刊行した。

「タイプライターのアームが絡まないような配列だとか、活字を入れる棚の配列とか、インターネットでは根拠のない俗説が流れていたの、まずそれを正したかったと語る。アームを前に押し出して活字を打つタイプライターができるのは一八九一年以後。しかし、このキー配列は八二年には既に存在していた。活字棚も実際に米国でたき

ん見たが、別の配列だった」安岡さんは米国で、当時の

モザイク 新世紀 学に挑む

パソコンのキー配列の謎、実証的に

特許申請書にある図面や模型を確認。雑誌広告のほか、ローカル新聞に掲載されたタイプライター開発者の訃報を手掛かりに資料を見つけ出した。また、資料のない時期については、開発者が友人に送った手紙を分析。「打ち間違いのキーは隣り合っている」と推定し、キー配列の変遷の空白を埋めていった。そこから推論されるのはこうだ。

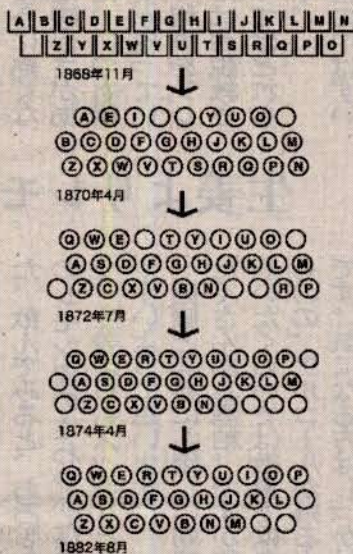
漢字字体の変遷、データ蓄積

のキーを最上段中央に、逆に頻度の低いQは左上に持ってきた。次に右下に記号を置くため、PやRが押し出され、上段に上がったという流れだ。「Aがふらふら一定しなかったり、SやCには一貫性がない。一つ一つの細かな動きの理由は分からない。そこが歴史学の難しいところ」という。

最初のQWERTY配列は「レミントン・スタンダード・タイプ・ライター No.2」だ。その売り出し日が、一八八二年八月から十月までの間だったことまで突き止めた。

そしてタイプはまず速記者が注目。十本指のタイピング方式が開発され、九〇年代に入ると、タイプは爆発的に売れ、キー配列は定着していく。

徹底した実証主義。「みんなが本当らしく言っていることより、一人が必死で調べたことが正しい方が多い。集合知に対するアンチテーゼ。中世みたいなうわさの世界に生



キー配列の変遷(「キーボード配列QWERTYの謎」から)

きてるわけじゃない。特に理系の知識が必要な歴史分野は、うその情報流れやすい。それを減らすことが、人文学が世の中に役立つところ」ももとは理系の「コンピ

ューター屋」だった。小学生のころ、母親が買い物しての間、電電公社(現NTT)のショップにあったコンピュータの端末で、簡単なプログラムを組んでいた。中学時代にパソコンを父に買ってもらう、プログラムを雑誌などに投稿した。京都大工学部に進み、スーパーコンピュータで研究、そのまま同大学大型計算機センターに就職した。

そこで、米国在住の中国人留学生からメールが文字化けすると相談を受けた。調べるにアルファベットは化けず、漢字ばかりが化ける。中国と日本で文字コードが違うことが分かった。当時は、国際文字規格ユニコードが普及する前。「文字コードを研究する人がいなかった」ため、文字の世界へ入り込んだ。二〇〇〇年、漢字情報研究センターへ。同センターが保管する膨大な石刻拓本資料のデジタル画像化を進める。漢



やすおか・こういち 1965年、大阪府生まれ。京都大大学院工学研究科修士課程修了。同大学大型計算機センター助手などを経て、2000年から現職。JIS委員として、J

IS規格の策定に携わる。著書「キーボード配列QWERTYの謎」「文字コードの世界」などは妻素子さんとの共著。